

最初のエッセイは、あまり興味が湧く話がなかったが、幾つか興味のある話が出ていたのでメモした。

「夫婦」

二十数年ほど前、編集者から聞いた話である。彼が勤めている出版社は、発行している雑誌に賞を設けていて、小説を公募して優秀作を単行本化していた。さまざまな内容の原稿が送られてくるのだが、そのなかのミステリー小説のほとんどに、一つの傾向があると教えてくれた。

「殺される被害者が、ほとんど主人公の妻なんです」

ミステリー小説となると、殺人事件がつきもので、当時は応募してくるのも男性が多かった。送られてきた原稿を、選考委員に渡す前に、編集部で下読みをする際、あまりに妻が事件に巻き込まれて亡くなる設定が多いので、編集部でも驚いた。なかにはここで妻が犠牲になる必要など全くないのに、無理やり、消された印象がある内容のものもあったという。

夫は自分ではもちろん、そんな罪を犯せないから、せめて小説のなかだけでも、妻にはいなくなっていたほしいという願望を込めたいという。またパソコンも今ほど一般的ではなかったし、ワープロはあったけれども、まだまだ手書きの人が多かった。

「原稿用紙を見ると、妻が亡くなる場面になると、思わず力が入ってしまうみたいで、明らかに筆圧が強くなっているんです」

なかにはあまり自分の気持ちを噴出させすぎて、途中から「妻」という漢字を書き間違えて、最後までずっと、「毒」になっていた原稿もあった。

「違法シェアハウス」

するとある時期から、誰も住んでいなかった隣家に、若い女性が入り出すようになった。それも一人や二人ではない。彼女が家にいるときに、隣家をチェックしていたら、日々何人もの若い女性が入り出している。目撃しただけでも十人以上いた。みな親しげにしている様子もなく、単独で行動している。女子寮にでもなったのならば、入り出す女性たちが、お互いにあいさつをすとか、会釈をすとか、何かしらありそうなのに、みなスマホを見ながら、黙々と家に入り、出ていく。家のスペースに比べて、明らかに住人の数が多すぎる。どうしたのだろうかとずっと考えていたところ、最近、違法なシェアハウスが話題になり、隣家はそれではないかと思いついたという。

シェアハウスもきちんとしたところは、ちゃんと住環境が整えられている。しかし違法の可能性がある場合は、住人にはただ寝るだけの二畳分、三畳分程度のスペースしかない。火事等に関しても、対処しているとはいえない。それでも実家を離れて仕事を見つけないとなると、住所がなければ履歴書も書けないので、保証人が不要で狭くても家賃が安い、そういったハウスに住んで、とりあえずの寝場所と住所を得るしかないのだ。

あのまま住宅を賃貸にしても、あまりに古いので家賃は高くできないところを、借

家人を詰め込み、一人一万円の家賃でも二十人に貸せば、毎月二十万円の収入になる。ひと月の収入が増えるので、メンテナンスしたり、建て替えたりする手間や経費をかけないで、そのまま使っているらしい。

世の中の動きを把握して、それに反応した結果だが、よくそんなシステムを考えたものだとあきれしかたない。とにかく管理が行き届いていないので、ごみが散乱していたり、深夜、外で携帯電話で話しているのか、けたたましい若い女性の笑い声が、延々と聞こえてきたりと、近隣住民にとってはありがたくない状況らしい。苦情を言おうにもどこにいったいいか分からず、出入りする女性に、住人に静かにするよういってほしいと頼んでも、「私には関係ない」と言われる。違法であってもそのシェアハウス自体は、需要と供給が成り立っているのだけれど、近隣の住人にとっては、頭が痛い存在になっているのだ。

「年寄りの冷や水」

あれくらいのダンスだ

つたらできると軽く考えていたのに、実際にやってみたら、運動量が自分の体力をはるかに上回っていた。還暦で週に四回、小一時間歩いているくらいでは、「恋するフォーチュンクッキー」は通しで踊れないのだ。しばらく脱力していたら落ち着いたので仕事に戻った。血の巡りは良くなったようであったが、せつかく覚えた振り付けも、翌日になったら、見事に忘れていて、知力と体力の明らかな衰えを痛感したのだった。

「美人」

ところがついこの間、たまたま出かけた場所で、その目も覚めるような美人に遭遇してしまった。場所はある飲食店で、高齢の大女将から見ると、孫の妻という立場の女性だった。女将も現役なので、彼女は女将見習いといった立場になるだろうか。三十代後半から四十代初めくらいの年齢の彼女が姿を現したとたん、周囲の雰囲気がからっと変わり、透明感が漂ったのには驚いた。彼女のそばには十数人の人がいたのにもかかわらず、他の人々の存在が消えてしまうほど、彼女だけが際立っていた。私は思わず、「うわあ」と声が出そうになったのをぐっとこらえて、彼女の顔に見とれてしまった。

私の基準とする美人は、内面も多分に含まれる。六十年も生きていると、外見がきれいでも、性格が悪い人には嗅覚が働くので、そういう人は私の基準では美人から外す。内面の充実があつての美人なのである。私の目がくぎ付けになった美人は、それも見事にクリアしていた。化粧は薄いのに、目は潤んでぼちちりと大きく、鼻も口も上品。現代風の男顔のきりっとした美人ではなく、押し付けがましくない控えめな雰囲気の美人であるところも好ましかった。

久しぶり美人を見て、私はうれしくなって、その店から出た後、同行した年下の女性に、「あの方、おきれいだったわね」といったら、「私もびっくりしました」とうなずいていた。そして女二人はなぜかここにこしていた。男性だけではなく同性も、感じのいい美人は好きなのである。

「先輩」

知り合いの女性から聞いた話である。彼女の友達の、性格が優しい息子さんは大学三年生で、どこの大学でもするように、所属している部の新入生歓迎コンパに参加した。時間がたつうちに、先輩の一人が泥酔して、彼にしつこく絡んできた。「飲め、飲め」と飲酒を勧め、ほとんど飲めない彼は、「すみません。僕はだめなんです」とやんわりと断り続けた。周囲にいた学生たちも、「本当にこいつは飲めないの」と先輩の行為をやめさせようとする、それが気に入らなかったのか、先輩は突然、ビール瓶を彼の口の中に勢いよく突っ込み、**彼の前歯を折ってしまった**。先輩の暴挙に学生たちが静まり返ったなか、被害者の彼は文句も言わず抵抗もせず、そのままの姿で何もなかったかのようにしていた。するとその先輩はむっとして席を離れ、**知らんぷりをして飲んでいた**というのだ。

話を聞いた私は、

「それって、傷害事件なんじゃないの。ひどすぎる」

と怒った。

「コンパ以来、先輩は彼の姿を見ると、逃げるようになったんですって」

「逃げるってどういうこと？ きっちり親と話をつけないとだめでしょう」

「それがねえ、部活の先輩については、他にもいろいろと問題があるのよ」

彼女は顔を曇らせた。

被害を被った彼が、二週間、海外に短期留学することが決まり、その時期が先輩たち四年生の卒業式と重なってしまった。私からすれば、個人の事情だし、何の問題もないのではないかと思うのだが、部活動をしていると、そう簡単にはいかないようだ。

まず部活担当の教授、部長、副部長、四年生の先輩全員に事情を説明した。みな了承してくれたつもりだったのに、歯を折った人とは別の先輩が「そんな話は聞いてない」と怒り出し、自分たちが卒業するときに、留学するとは何事だと大騒ぎし始めた。そして部員全員で集まり、その前で彼に落とし前をつけさせると息巻いているという。それを聞いた彼が先輩に電話をして謝っても、ろくに相手もしてくれなかった。

仕方なく先輩に指定された日時に、部室に行くと部員たちが困った顔をして集まっていた。ところがいつまでたっても**先輩は姿を見せず、連絡も取れない**ので二時間後、解散になった。この先輩も最初からそうするつもりだったのか、良心がとがめたのかは分からないが、騒ぐだけ騒いで逃げたのである。

私は再び怒ったのだが、一番驚いたのは、彼の歯を折ったり、因縁をつけてきた先輩たちが、二人とも**女子学生**だったことである。おまけに専攻は福祉。どんな場所にも問題のある人はいるし、その人なりに反省もするのだろうけれど、彼女たちが社会に出て、ちゃんと仕事ができるのだろうか、私は心配になってきたのである。

スカンツ 丈の長いスカートとパンツが合体したデザインの、最近の造語だと知った。

「上から目線」

あるとき義父母と彼女の家族とで、義母手作りの昼食を食べていたら、義父が、
「最近はどんなものを食べてるんだ」

と彼女に聞いてきた。子どもがファミリーレストランが好きなので、週に三、四回はそこで食事をしていると話したら、彼は、

「どうして家で作らないんだ。子どもに外食の癖をつけさせると、ろくなことがない。あんたはずっと家にいるんだから、ちゃんと子どもに手作りのご飯を食べさせろ」

と怒ったというのだ。彼は長年、調理の仕事をしていて、食べるものにとでもうるさい。孫が赤ん坊のときは何も言わなかったのに、成長するにつれて、「いったいどんなものを作って、食べさせているのか」としつこく聞くようになったという。彼としては孫の食生活が気になっているのだろうが、料理担当の彼女としては、とても迷惑なのだそうだ。お義父さんは、孫かわいさで口を出したのだろうし、彼女の立場を考えれば、作るのが面倒くさい日もあるだろうから、外食は楽なのだ。

彼女は義父と顔を合わせるたびに、一週間の食事の内容をチェックされる。

「上から目線で言ってくるから、本当に腹が立つんですよ」

それを聞いた私が、

「お義父さんはあなたよりも、ずっと年上なんだし、気になって忠告するんですよ」

と言っても、

「でもとても偉そうなんです」

と顔をしかめた。

彼女が不愉快になったのは気の毒だが、年上の人、ましてや義父に偉そうにされても、それは仕方がないような気がするが、彼女はそうではなかった。お義父さんの発言に、頭ごなしに叱りつけられた印象を持ったのかもしれないけれど、それは「上から目線」とは違うような気がする。息子の妻に対して、上からではなく「下から目線」で話をしないと、相手は腹を立ててしまう。また、いったん心に納めて、少しでもわが身を反省するきっかけにしようとする気持ちは彼女にはない。自分に対してあれこれ言われるのが嫌なのだ。私はどっちもどっちと思いながら、まあ、うまくやってくれと、心の中で彼女に向かってつぶやいたのだった。

「同い年」

私より少し年上の友だちが、先日、小学校六年生のときのクラス会に行ったときの話である。みんなで集まろうと声をかける人もおらず、その前にクラス会が開かれたのは、三十年以上前だった。久しぶりにみんなと会えると、彼女は楽しみに会場の飲食店に出向いた。その店は畳敷きの大広間が幾つもあり、たまたま会が重なったらしく、どの部屋も客でにぎわっていた。

友だちは店のアルバイトらしき学生に小学校名を告げ、部屋はどこかと尋ねると、

学生は部屋割りがよく分かっていないようで、大人数がいる部屋のふすまを開けた。

「こちらでしょうか」

友だちは部屋をのぞいてみた。

「もうちょっと年齢が下の集まりだと思うんですけど。こちらはちょっと年齢層が高い方ばかりみたい」

すると自分の名前を呼びながら、中から一人のおじいさんがにこにこしながら近づいてきた。顔をよくよく見たら、学級委員長をしていた男の子だった。その部屋にいたのは高齢者の集団かと思ったら、自分のクラスメイトだったのである。

「座高」

健康診断は嫌じゃなかったが、座高測定だけは嫌だった。

書く仕事を始めた若いころ、打ち合わせが終わって席を立つと、

「座っているときは背が高いのに、立つと低いんですね」

と相手に言われたりして、座高は私の悩みの種だったが、こればかりはどうしようもなかった。

「孫の手」

孫の手はいつも仕事をしているノートパソコンの横に置いていて、かゆくなったらすぐ手に取れるようにしている。子どものころは、蚊に刺されたとか、あせもができたときにかゆくなかったが、年齢を重ねるとそういったわけでもないのに、体がかゆくなるのが不思議でならない。加齢によってかゆみ物質が体からにじみ出てくるのだろうか。

BBA ババア